モルモン書は現代の偽典

ジョセフ・スミスが19世紀アメリカで
霊感によって著した

ロバート・M・プライス〔著〕
沼野治郎〔訳〕

せせらぎ出版

はじめに

末日聖徒イエス・キリスト教会（通称モルモン教会）の最も重要な書物、「モルモン書」がフィクション（創作）であると気づくことは、天動説が間違っていて地動説が正しいことを受け入れたコペルニクス的転回に相当する、と一部の理知的な教会員は見ている。

これは大部分の教会員にとって受け入れ難い考え方である。というのは、教会は近年モルモン書が史実に基づくと強調し[1]、会員もそう信じて疑わないで信仰生活を送ってきたからである。このことは末日聖徒が全般的に聖書を含む聖典に対して直解主義に立って、文字通りの意味に読み、解釈してきた特徴と符合する。

ただ、教会の指導部は一貫してモルモン書の地理に関して、距離を置く姿勢を公的に示しており、読者に 宗教的な書物として、信仰と祈りをもって読むように勧めている[2]。

そのような環境の中にあって、私は若い頃、書かれている通りのことが起こっていたのだと思いながらモルモン書を読んでいた。そのうち教会内の解説書を読むうちに、徐々に理解が進んで結局自然な帰結として、米聖書学者R.M.プライスのこの記事にたどり着いた。その過程を振り返ると、まずブリガムヤング大学のヒュー・ニブレー（聖書、モルモニズム研究に詳しい）が記録の継承者は編集者、翻訳者のいずれも自己の解釈や見解をさしはさんで務めを果たす、と書いているのを読んだ。私自身もモルモン書が幼児のバプテスマに反対するくだりなど、うすうす19世紀プロテスタント内の論争が反映しているのではないかと直感していた。また、モルモン書について中南米の考古学的、言語学的証拠が得られず、その方面の研究を断念する末日聖徒の学者たちが相次いでいることにも気付いてい

た。モルモン書は史実性に固執するより宗教書として受けとめるべきである、と社会学者ローエル・L・ベニオンもヘンリー・アイリング（現副管長の父君で著名な化学者）も結論していた。そうこうするうちに、1970年代後半にモルモン書を偽典視する学者たちが教会内外に出始めた。ブリガムヤング大学のトルーマン・G・マドセンがその方面の研究で先鞭をつけ、東部から著名な偽典学者たちを招いて特別なシンポジウムを開いた。その後、教会の学者たちの間に「文学としてのモルモン書」など、内容分析を重視する動きが見られたのも、このような状況の裏返しと見ることができた。

ここに邦訳するロバート・M・プライスの記事の原題は、“Joseph Smith: Inspired Author of the Book of Mormon” で、Dan Vogel and Brent Lee Metcalfe ed., “*American Apocrypha*” Signature Books, 2002 に収められている。この記事は当のモルモン教会からも日本のキリスト教界からも歓迎されないかもしれない。LDS教会（員）にとってはモルモン書を偽典視・フィクション視することは到底できないからであり、キリスト教界では異端の元凶であるような書物を好評価する記事にはおよそ馴染めないだろうと予測するからである。少なくとも当座はあまり顧みられないことを覚悟している。

しかし、著者のプライスが後に述べているように、モルモン書に一連の批判的手法を適用することは、末日聖徒にとって馴染みのないことであっても、創始者と末日聖徒の聖典の重要性を高めることになる。特に非モルモンの眼にそう映るはずである。そして、モルモン書が広範に欽定訳聖書に依拠していることが分かれば、共通の聖書的伝統を引き継いでいることを知って、モルモンと非モルモンが和解の方向に向かうと期待される。双方の研究者から始めて、徐々にその方向に向かうことを私は希望している。

プライスの記事を紹介するに際して、参考までに　一、「モルモン書」を現代の偽典と見なした研究者・学者たち、二、「モルモン

書」理解に参考となる19世紀初頭の背景資料を添えた。また、記事の冒頭に全体の要約を、そして節毎にその要約を添えさせていただいた。

翻訳者　沼野治郎

註

1 Daniel C. Peterson, “Mounting Evidence for the Book of Mormon” *Ensign*, January, 2000; Dallin H. Oaks, “The Historicity of the Book of Mormon,” in *Historicity and the Latter-day Saint Scriptures*, ed. Paul Y. Hoskisson.（Provo, UT: Religious Studies Center, Brigham Young University, 2001）

2 Daniel H. Ludlow, ed., “*Encyclopedia of Mormonism*” Macmillan Publishing Company, 1992, Vol. 1, pp. 142, 176.

目　次

はじめに　3

1「モルモン書」は現代の偽典
―ジョセフ・スミスが19世紀アメリカで霊感によって著した― …… 9
よみがえった文書　10
先行例に続く新参者ジョセフ・スミス　14
際限のない物語の世界　18
「なぜわたしの名を聞くのですか」（創世32:29）　22
「変形エジプト文字」は「異言」に相当　33
後期預言者を受け入れた後期聖徒（日本語では末日聖徒）　36
預言とその改訂・加筆　39
ニーファイ人の菩薩（涅槃に到達できるが、苦しむ衆生を憐みこの世に留まる人）　48
「もし遅くなっても、それを待て」（ハバクク 2 : 3 ）　55
黙示と弁明　62

2「モルモン書」を現代の偽典と見なした研究者・学者 ……77

3「モルモン書」理解に参考となる19世紀初頭の背景資料 ……81
背景資料の出典及び参照文献　98

用語・人名 解説 ……101
モルモン書内の書名（p. 110）を含む

聖句索引 ……111

索　引（プライスの記事） ……113

記事で言及された偽典リスト ……117

訳者あとがき　118

1「モルモン書」は現代の偽典
―ジョセフ・スミスが 19 世紀アメリカで霊感によって著した―

翻訳者による要旨（abstract）

列王下 22:8 でヒルキヤが発見した文書は、実は彼や申命記学派が革新を起こそうとして作り出したもので、学者たちはモルモン書もスミスが発見したのではなく、彼が創作したものと見ている。批評的歴史研究者は、ジョセフ・スミスがしたことは偽典作者がしたことと何ら変わりがないと見る。そして読者はフィクションであっても、「一時不信を保留」して物語の世界に入り、啓発され健全な影響を受ける。ジョセフ・スミスはニーファイ人とレーマン人の壮大なドラマを作り出して何百万人もの人々に影響を及ぼしてきた。

ユダヤ教で正典が閉じられようとした時、新しく登場した預言者には地下出版の形で回覧する道、すなわち偽典を書くしか方法がなかった。スミスは相争うキリスト教諸派に対し、新しい聖典を創出して聖書釈義の牙城に挑戦した。古代預言者によるとした偽典、モルモン書であった。申命記に偽典の要素があると分かっても尊重されるように、モルモン書もスミスが著した偽典であると認識されれば、むしろその意義が再評価される。

クロッサンなどによると福音書記者は旧約聖書から筋を無視して、活用したいモチーフを取り出し、自由に並べ替えて新しい物語を創り出した。モルモン書の場合、文字化される前に口頭伝承があったとは考えにくい。先行する文書資料から様々な主題や明瞭な表現を集めて、新しい文書が創出された。その基本的資料源は聖書であった。

スミスはヨハネとニーファイ人の弟子３人の寿命と使徒としての働きの時間を引き延ばし、いわば使徒の時代をわれわれの時代に届かせ、使徒行伝の新しい章を追加したのだ。新しい「古代の」聖典が正典に加えられたと見ることができよう。それはモルモン書と呼ばれ、ジョセフ・スミスが霊感を受けて著したのだった。

よみがえった文書

列王記下 22 章で祭司ヒルキヤは神殿で文書を発見し王に報告する。これは文書が過去に隠され、後に世に現わされたという点で死海写本、ナグ・ハマディ文書に共通し、モルモン書もそれに連なる。ジョセフ・スミスは隠されていた文書をよみがえらせたのである。ただ、ヒルキヤが発見したとされる文書は、彼や申命記学派が革新を起こそうとして作り出したもので、同様に今日批判的学者たちはモルモン書についてもスミスが発見したのではなく、彼が創作したものと見ている。

列王記下22章に古代ユダ王国の歴史にとって重要な場面が描かれている。その残響は今日にまで及び、現代人の耳目に届いている。ここでわれわれは二つの点に注目したい。この場面は聖書の愛好者には聞き覚えのあるものである。祭司ヒルキヤはヨシア王に、簡潔ながらただならぬ意味を持つ、「一冊の書物を見つけました」という報告をしている。王の指示で彼は、神殿改装のために雇われた職工に払う資金を探し出そうとしていた。そんな時、塵を払い物陰を整理していると突然、驚くべき秘密とも言うべき朽ちかけた巻物が出てきたのである。初め彼は探しているお金の記録で、古い街の台帳か何かだろうと思って、開いて 1 ページか 2 ページをざっと見た。彼が息をのんだので、そこに居合わせた者は作業が世俗的なものでなくなったことを察した。大がかりな春の掃除と思っていたものが、発掘作業となったのである。その古い書はほかでもない「契約の書」、言いかえると今日「申命記」と呼んでいるもの（少なくともその主要部分 4-33章）だった。ヒルキヤは即座に王が目を通すべきものであると知った。

若い王は中身が読まれるのを聞いて、仰天した。長々と続く不法

に関する律法や儀式の作法を記した部分は、つい眠気がさしたことだろう。しかし、申命記を特徴づける祝福と呪いの説明が反復されるに至って、揺り動かされるように目が覚めた。彼は死刑の宣告を受けたような思いがした。というのは彼が王位に就くまで、ユダ王国は堕落した為政者や背信者が連続して王位を継ぎ、その乱暴・蹂躙の様子が列王下の先行する章に列記されていたからである。ヨシアはそういった制止ないし禁じられた行為が、先代の王たちの実質的な身上書であることを知っていた。彼は神の前に事態を修正しようと努めていたが、女預言者フルダは、ヨシア自身は悲劇的な最期を遂げないですむけれども、彼の働きは微々たるもので遅きに失している、と告げた。

聖書のこの部分は多くの点で重要であるが、中でもとりわけ重要なのは申命記の出現について価値ある情報を提供していることである。聖書の正典の他の個所でも、同じように素性を明らかにする手がかりがあればどんなに助かることだろうか。それはともかく、ヨシア、ヒルキヤ、そしてこの発見された書のくだりは、他のキリスト教のどのグループより末日聖徒にとって思い当たるところがあるのではないだろうか。というのも、モルモン書が明るみに出たいきさつと似ているからである。モルモン書も古代の聖典が長い間地中に埋められていた後、宗教と国家の重大局面にあって再浮上し、長らく忘れ去られていたメッセージを新たに伝えることになった、と言われている。

申命記とモルモン書再発見の話を、今からおよそ50年前ほぼ時を同じくして発見された死海写本（於イスラエル・クムラン）とナグ・ハマディグノーシス文書（於エジプト・チェノボスキオン近郊）の発見のいきさつと比較すると興味深い。モルモンとモロナイは命を狙う敵の手を逃れて、正にアメリカにおける救いの叙事詩の終焉を迎えようとしていた。その場面にいたる話を再現するかのように、後

二者の文書もまたそれらが隠されるにいたる事情を背後に持っていたのである。

死海写本は、ローマ軍のエルサレム包囲攻撃により町が壊滅させられた場合に備えて、――事実そうなるのであるが、――エルサレムから持ち出され、ユダヤ砂漠のあちこちに埋めて隠された[1]（伝統的な見方[2]が考えるように、写本［巻物］群がクムランのエッセネ派僧院の蔵書であったとしても、そこに退避するように置かれていたのはやはりローマ軍から護るためであった）。

ナグ・ハマディ文書の場合、現在この文書は知られている最初のキリスト教僧院の共同体、聖パコミウスの集団が所有していたと考えられている。われわれは紀元367年の復活節に僧侶たちが、アタナシウス監督が出した復活祭の回勅に目を通しながら、眉をしかめ困惑している姿を思い浮かべることができる。書簡にはわれわれが現在所有している新約聖書27書の書名が列記されていて、誰もそれ以外の文書を聖典として参照してはならないと言明していた。僧たちの念頭にあったのは、疑いもなく彼らが大切にしていた次のような文書群であった。***トマス福音書、真理の福音書、ピリポ福音書、マグダラのマリア福音書、偉大な見えない霊の秘密の書、ヨハネ外典、ヤコブの黙示録、使徒パウロの祈り、完全な心である雷鳴***、など。僧侶たちは黙って不安のうちに視線を交わした。次に何が起こるか彼らは知っていた。アタナシウスの審問官たちがやってきて、正典に含まれない文書を全て差し出すよう求め焼いてしまうのである。ちょうど異教のローマ人たちが、前に正典の文書を出すように求めて消し去ろうとしたのと同じである。それぞれがシャベルを手に持ち、文書が注意深く梱包された。[3] このようにして二つの分派が所有していた文書群が後世に伝えられることになった。瓶（びん）にメッセージを入れて海に流し、将来誰かが見つけて読めば何かの役に立つだろうと考えるのに似ている。

若いジョセフ・スミスもモルモンとモロナイの金版をふるえる手で掘り出したのであった。それは夢想だにしなかったイスラエルの部族の歴史であり、キリスト教の救い主が新世界を訪ねたという失われた記録であった。堕落したレーマン人がニーファイ人のモルモンとその息子を追い詰めて死に至らせたように、若いスミスも「焦土と化した地域[4]」（Burned-Over District）の対立し合う福音伝道者や信仰復興運動家たちの異なる主張に包囲攻撃されている思いがしていた。それで、版の中に語られる類似の物語が彼の心に強い印象を与えたのもうなずける。ニーファイ人が聖書のイスラエルの支族として西半球に長期にわたって生きのびたように、末日聖徒の教会もほとんどのアメリカ人と一定の距離をおきながら、類似のキリスト教派として孤独な、しかし自信に満ちた歩みを幾世代にもわたって続けていくことになる。

モルモン教会と「袂を分かった兄弟分」の間の主な反目と争点は、皮肉にも列王記下22章に見える失われた申命記発見を想起させる。というのは、今日実質上全ての批評的学者たちはヨシアとヒルキヤの話が、それとなくにおわせている真実を隠そうとしていることに気づいているからである。その書物は発見されほこりを払ったものではなくて、実はヒルキヤ、フルダ、エレミヤ、それに「申命記学派」の者たちが作り出したもので、若く影響を受けやすい王を取り込んで、自分たちの宗教上の課題に取り組もうとしたのであった。列王下で反動・保守的（過去を回復する）動きとして描かれているのは、実は革新的な（新しい未来を切り開いていこうとする）ものであった。申命記はもちろん北のイスラエルと南のユダから伝統的な資料を受け継いでいたけれども、本質的に新しい書であった。ヤハウィストによる物語（「J資料」）とエロヒストによる物語（「E資料」）に収集された従来の律法になされた、いわば「当代」の改訂であり更新であった。新たに整理した一神教（あるいは少なくとも単

一神崇拝）という足場に立ち、また奴隷、家畜、使用人に対する人道的な関心から、ヒルキヤ、フルダなどはあまりにも長く辟易しながら目撃してきた彼らに対する酷使に対し神の怒りが下るのを避けたいと望んだ。それで彼らは密かに巻物を記したのであった。ちょうど連邦の諸条項を強化する目的で委任された人たちが、実際は別に「憲法」を作り出した合衆国憲法制定者のようなものだった。

前にも述べた通り、批評的な学者はほとんど全てジョセフ・スミスがモルモン書を発見したのではなく、創作したのだという考えで一致している。スミスの目的は、彼が取った方法と同様、ヒルキヤの目指したことと似通っている。彼は19世紀のキリスト教のどれを信じればよいか困惑していた。いずれも他の宗派より何らかの点で優れているという優位性を感じさせることなく、すべて何か重要な点で欠如しているように思われた。それでスミスは近過去と決別し、より遠い過去に訴えて、新しい未来に踏み出そうとしたのであった。このようにして彼は何か新しいもの、こうであった***に違いない***という想像上の神聖な過去を創出したのである。

先行例に続く新参者ジョセフ・スミス

「史的イエス」の場合、虚飾されたものを排除し、「力強い」イエス像に達したとされるが、究極のところは不明である。新しいキリスト像の提示は、A. シュワイツァーが指摘したように研究者それぞれの選択肢の一つであった。学者たちは再発見した過去が斬新なものに見え、それに従って未来へ向かおうとする。末日聖徒の運動は古代アメリカのキリスト教に理想を求めた。ジョセフ・スミスがモルモン書を著したという見方は、真剣に向き合わなければならない。古代文書の復元過程と古代文書を創造的に書くことは異なっていながら、後者も前者の延長線上にあり両者の差は縮まっていくからである。

2「モルモン書」を現代の偽典と見なした研究者・学者

（あいうえお順）

ここで言う「偽典」（pseudepigrapha）とは、聖書の正典・外典に含まれないユダヤ教・キリスト教の文書で、書き手が別の権威を感じさせる人物、すなわち偽りの著者名を冠して著した文書を指す。日本語の与える印象とは違って、聖書学では正典成立の背景を知る関連文書として、その意義が内容の点からも重視されている。聖書の中にも偽典とされる文書が存在し、両者の境界線は時に明確でなくなっている。モルモン書は19世紀前半にアメリカで生まれたもので、勢いアメリカの学者が取り上げ、日本の学者はまだほとんど取り上げていない。以下のリストではアメリカのモルモン教徒と教徒外の学者が同数上がっている。

1．ウイリアム・F・オールブライト（William F. Albright）

聖書考古学者。モルモニズムは広義の偽典を所有していると述べた。

William F. Albright, "*Archaeology and Religion*," Cross Currents, Vol. IX, no. 2（Spring 1959）

2．ブレーク・T・オストラー（Blake T. Ostler）

1983年書評ページでモルモン書を偽典的拡張、タルグーム化の例と見ることができると示唆。翌年モルモン書偽典説を発表。さらに87年「古代資料に現代的拡張を施したモルモン書」という拡張説を発表した。

"Responsible Apologetics," in *Dialogue: A Journal of Mormon Thought,* Vol. 16, No. 4（Winter、1983）p. 143; A review in Noel B. Reynolds, ed., *"Book of Mormon Authorship: New Light on Ancient Origins,"* Ostler, "A Pseudepigraphic Theory of the Book of Mormon," 1984; Ostler, "The Book of Mormon as a Modern Expansion of an Ancient Source," *Dialogue*, Vol. 20, No. 1（Spring 1987）, p. 66-124.

３．クリスター・ステンダール　(Krister Stendahl)

元ハーバード大学新約学部長。山上の垂訓と第三ニーファイを比較し、モルモン書を偽典文学の特徴を顕著に具えた書物と位置づけている。1978年ブリガムヤング大学で行われたシンポジウムで発表。

"The Sermon on the Mount and Third Nephi," in Truman G. Madsen, ed., "*Reflections on Mormonism : Judaeo-Christian Parallels*," Religious Studies Center, Brigham Young University, 1978, p. 152.

４．ジェームズ・H・チャールワース（James H. Charlesworth ）

デューク大学准教授、専門はキリスト教の起源。偽典研究所長。メシア待望論の面で偽典とモルモン書を比較し、両者の間に興味ある類似点が見られると述べた。同上シンポジウムで発表。

James H. Charlesworth, "Messianism in the Pseudepigrapha and the Book of Mormon," in Madsen, "*Reflections*."

５．アンソニー・A・ハッチンソン（Anthony A. Hutchinson）

米カトリック大学で聖書学を学ぶ。モルモン書には解釈を施す（ミドラシュ）技巧、偽名の使用、教義や本文の改訂が見られ、19世紀に書かれた創作と見ることができる。しかし、それは古代の預言者や聖書の著者も行っていたことで、現代に出現した聖典である、と説明する。

"A Mormon Midrash? LDS Creation Narratives Reconstructed," *Dialogue* Vol. 21, No. 4,（Winter 1988）p. 70. ; Anthony A. Hutchinson, "The Word of God is Enough: The Book of Mormon as Nineteenth-Century Scripture," Brent Lee Metcalfe, ed., "*New Approaches to the Book of Mormon*." Signature Books, 1993.

3「モルモン書」理解に参考となる 19 世紀初頭の背景資料

新約聖書について古くは C. K. Barrett の「新約聖書の背景：精選された資料」（ハーパー・アンド・ロウ、1961、英文）、最近では大貫隆、筒井賢治編訳「新約聖書・ヘレニズム原典資料集」（東京大学出版会、2013 年）などが出ていて、モルモン書についても同様の資料が整理できないかと考えた。ジョセフ・スミスがこれらの資料を皆読んでいたと主張するものではない。19 世紀初頭の読者（アメリカ人）が承知していた、またスミス自身も耳にしていたり、目を通していたりした可能性があるという点で、モルモン書理解に欠かせない研究領域である。ただ、ここでは参考資料として若干簡単に紹介するに留める。今後さらに精選・増補、改訂が行われ、充実していくきっかけになれば幸いである。

特に翻訳者の名前が記されていない場合、沼野が訳した。各資料の終わりにかっこ内に記したのは平行表現が見られるモルモン書の箇所である。

目　次

I　全般的並行・関連資料

1）アメリカインディアンはイスラエルの末裔という通説に関連して

(1) 外典エズラ記（ラテン語）

(2) エサン・スミス「ヘブライ人の眺望」（*View of the Hebrews*）

(3) ジョサイヤ・プリースト　「アメリカ西部古代誌と諸発見」

2）福音主義的プロテスタンティズム

(1) ロレンゾ・ダウ「ロレンゾ・ダウの身に臨んだ神の御手」

(2) ジョナサン・エドワーズ「神の驚嘆すべき業の信仰の物語」

(3) ジョン・ウィンスロップ「山の上にある町」（説教）

(4)「生まれながらの人」(回心をめぐって)

i ジェームズ・アーウィン「初期巡回伝道の回想」

ii ウィリアム・バーゲス「人の生まれながらの状態」(説教)

(5) 三位一体説をめぐる賛否

i 三位一体に関する英国教会宗教個条、39 条

ii ユニテリアン派ジェームズ・イェーツ「ユニテリアン主義の弁明」

3) 文体面

(1) 欽定訳聖書

(2) ギルバート・J・ハント「最近合衆国と英国間で起きた戦争」

II　個々の並行事例・(モルモン書に現れる順に掲載)

1) 斬首による殺害　聖書外典「ユディト記」

2) 大淫婦　アダム・クラーク「聖書注解 批判的注付」

3) コロンブスの航海　ワシントン・アービング「クリストファー・コロンブスの生涯と航海の歴史」

4)「苦しみ給う神」 クーパー師 「シオン礼拝堂における説教」

5) 王制反対　トーマス・ジェファーソン、他「アメリカ独立宣言」

6) 平和主義(不戦論)　クエーカー創始者ジョージ・フォックス「平和宣言」

7) 秘密結社(盗賊団)

(1) ヨセフス「ユダヤ古代誌」 ウィリアム・ウィストン訳

(2) マサチューセッツ州議会 1824 年 3 月の報告

8) 生き長らえるユダヤ人

(1) バラード(物語風の民謡詩)「さまよえるユダヤ人」

9) 幼児のバプテスマ

(1) ヘンリー・クレー・ベッダー 「アナバプテストの指導者、バルサザール・ヒュブメイヤー」

10) 文明の滅亡(悲劇)

(1) エドワード・ギボン、朱牟田夏雄訳「ローマ帝国衰亡史

訳者あとがき

私はロバート・M・プライスの記事を翻訳していて、何度か彼はジョセフ・スミスとモルモン書に贔屓気味なのではないかと感じた。ニーファイ第三書に描かれたキリストの訪れとそこで展開された福音の宣教を、アメリカ版の福音と呼び、章節の中で十字架を伴わないキリスト教を新しく異なったキリスト論として、プライスは厭うことなく受けとめている。モルモン書は、昔隠され後に発見された文書、否、本当は革新のために創出された文書（偽典）として、典型的な先行例を申命記に見る。このモルモン書は偽典に分類され内容がフィクションであっても、読者に「一時不信を保留」して物語の世界に入らせ、読む者を啓発し健全な影響を与えてきた。このようにスミスはニーファイ人とレーマン人が繰り広げる壮大なドラマによって、何百万もの人々に影響を与えてきた、と言う。しかし、彼は自分がモルモン書の擁護者だとは考えていない。

ここで著者の紹介を簡単にしておくと、彼は1954年生まれで福音主義的な元バプテスト派牧師、後にリベラルなクリスチャンになり、現在はキリスト教的な無神論者。通称「聖書マニア」。1994年「高等批評ジャーナル」を創刊・編集し2003年まで続いた。その時にマーク・トマスにモルモン書の批評研究史を書いてもらっている。それがきっかけで2002年、ダン・ボーゲル、ブレント・リー・メトカーフ編「アメリカの外典」に論考「モルモン書は現代の偽典——ジョセフ・スミスが19世紀アメリカで霊感によって著した」を投稿した。

著者は偽典の研究の一環として、現代アメリカにおけるモルモン書に目をとめたものと思われるが、当然ながら、研究の対象としてモルモン書を実際に読み、内容によく精通している。彼のモルモン書

に対する関心は、この論文を発表した後も続いていて、2008, 2009年ブリガムヤング大学で開かれた一連の「モルモン書円卓会議」（Book of Mormon Round Table）に参加し、それが2011年「末日の聖典：モルモン書の研究」（R.M.Price, "*Latter-Day Scripture : Studies in the Book of Mormon*"）という論文集となっている。そこにプライスの論文10件が収められている。方向としては宗教社会学的な視点から関心を寄せているが、モルモン書を聖書学の知見に照らして考察することは非常に興味深い、と述べている。

私は若い時に末日聖徒になったが、ほどなく一般のキリスト教書も合わせて読むようになった。そして、ヨルダン社の「聖書学の基礎知識」シリーズや教文館の「聖書の研究」シリーズなどから少しづつ聖書学を学んできた。今回プライスの記事を訳していて気づいたことは、彼がウェルハウゼンの史料批判（文書仮説）、様式史、編集史の順に旧新約聖書の例を引き、合わせてモルモン書に適用して論旨を進めていることであった。また、物語理論をも援用している。言いかえれば、著者にとって偽典としてのモルモン書は現代の恰好な批評的研究のケーススタディとなっているのである。

最後に、この記事の翻訳は正直言って容易ではなかった。是非日本語にしたいという思いがあって、また趣旨はよく判っているつもりであったが、流れをしっかり把握して全文を訳すとなると、理解する上でいわば精神的な格闘をしばしば強いられた。何度も読み直し，推敲しなければならない個所があった。それでもまだ十分満足できる出来ではない。専門の聖書学者、偽典学者、それに末日聖徒の読者諸氏のご批判、ご指摘を乞う次第である。

2017年 2 月

沼野治郎

●著者紹介

ロバート・M・プライス（新約学博士、神学博士いずれもドリュー大学より取得）は、ニューヨーク、アムハーストにある探索研究所（Center for Inquiry Institute）聖書批判学教授であり、「高等批評学術誌」（*Journal of Higher Criticism*）の編集長であった（2003年廃刊まで）。彼の著書には *Deconstructing Jesus, Paul as Text: The Apostle and the Apocrypha, The Widow Tradition in Luke-Acts: A Feminist-Critical Scrutiny* などがある。また次のような学術誌に発表している。*American Rationalist, Dialog, Evangelical Quarterly, Journal of Psychology and Theology, Hervormde Teologiese Studies, Reformed Journal* 他。

●訳者紹介

沼野治郎（言語学修士、ブリガムヤング大学）は、1941年中国上海生まれ。大阪外国語大学中国語科（現大阪大学）卒、1974年から1976年までBYUに学ぶ。1980年以降、徳山大学、広島国際学院で英語教育に従事。1988-2000年、季刊「モルモンフォーラム誌」を刊行。著書に『私が接した言葉とその文脈』、『モルモン教をどう見るか：第三の視点をさぐる』、『現代中国語訳の聖書』がある。その他、ダイアログ誌、モルモン歴史学会報などに論文を投稿している。

モルモン書は現代の偽典
ジョセフ・スミスが19世紀アメリカで霊感によって著した

2017年7月10日　第1刷発行
著　者　ロバート・M・プライス
翻訳者　沼野治郎
発行者　山崎亮一
発行所　せせらぎ出版
〒530-0043　大阪市北区天満2-1-19 高島ビル 2 階
TEL. 06-6357-6916　FAX. 06-6357-9279
郵便振替　00950-7-319527
印刷・製本所　関西共同印刷所

©2017 ISBN978-4-88416-258-0

せせらぎ出版ホームページ　http://www.seseragi-s.com
メール　info@seseragi-s.com

定価（本体1200円＋税）
ISBN978-4-88416-258-0 C0014 ¥1200E

Robert M. Price, "Joseph Smith: Inspired Author of the Book of Mormon"
Dan Vogel & Brent Lee Metcalfe ed., "*American Apocrypha*," 2002

もっと読む

●電子本（PDF版、税込907円）を購入する

●紙の本（税込1296円）を購入する